秘書教育による秘書イメージの変容について

藤田主一
和田美和子
堀江　光

Ⅰ．研究の目的

“秘書”という言葉から，私たちはどんなイメージを抱くだろうか。秘書は上司が本来の職務に専念できるように補佐する人という意味を持つために，秘書の役割を上司の意思決定を支えるという受動的な立場として捉える見方が中心であった。しかし，今日のように組織の体制や時代的な背景が複雑になるに伴い，秘書の役割も能動的・積極的なところへ転換し，上司の活動が円滑かつ効果的に行われるように主体的・直接的な役割を持つようになってきた[1)]。

秘書に対するイメージを求められると，例えば，①書類を抱えてさっそうと歩く女性，②上司の仕事を陰で支える人，③機密・秘密を遵守する人，④こまめに世話をやく人などといった印象を答える場合が多いものの，秘書に関係した仕事に携わっていない人から見ると，秘書の本当の仕事を知らない場合が多いこともまた事実である。つまり，日本では秘書を専門職として位置づける意識が諸外国と比較して低く，未だ上記の①④の範囲から脱皮しないことも事実であろうと思われるからである。

秘書イメージについての心理学的な研究の中で，三好[2)]はＳＤ法（Semantic Defferential Method；意味微分法）を用いて，秘書志向や教師志向の大学生に実施した結果をまとめている。それによると，秘書志向群のイメージは『主観性』『感情』，教師志向群のイメージは『機能性』『感情』『充実性』という構造になっていて，職業の志向性によってイメージに違いのあることが見出されるらしい。本研究では，三好と同様の方法を用いて，本学学生の中から①秘書専攻の１年生（秘書教育を受けていない学生），②秘書専攻の２年生（秘書教育を１年間受けた学生），③秘書専攻以外の１年生の三群に，秘書イメージについて調査することにした。

II。研究の方法

1．調査対象者

(1)本学の経営学科秘書専攻の学生で，その内訳は以下の通りである。

H91年度生　138名，H92年度生　129名，H93年度生　132名。

(2)本学の経営学科経営実務専攻，文学科日本文学専攻・英米文学専攻の学生である。

J 92年度生，N92年度生，A92年度生の合計　378名。

2．調査材料

秘書イメージの測定にはSD法を用いたが，その材料は三好[2)]に掲載されていた形容詞対を応用した。形容詞対は，井上・小林[3)]が提出した機能(活動性)，価値(評価性)，感情，総合(力量性)に関する4領域40項目である。**図1**に示された形容詞対がそれにあたるが，各領域と項目番号との関係は以下の通りである。

＊機能（活動性）……1，5，9，13，17，21，25，29，33，37

＊価値（評価性）……2，6，10，14，18，22，26，30，34，38

＊感情　　……3，7，11，15，19，23，27，31，35，39

＊総合（力量性）……4，8，12，16，20，24，28，32，36，40

これら40項目の形容詞対を5段階尺度（非常に，少し，どちらでもない，少し，非常に）の両側に配置した質問票を作成した。

3．手続き

調査は，本研究の目的に沿うように以下の時期に分けて実施された。

H91年度生は，2年生4月の最初の講義時間。

H92年度生は，1年生4月の最初の講義時間，2年生4月の最初の講義時間の合計2回。

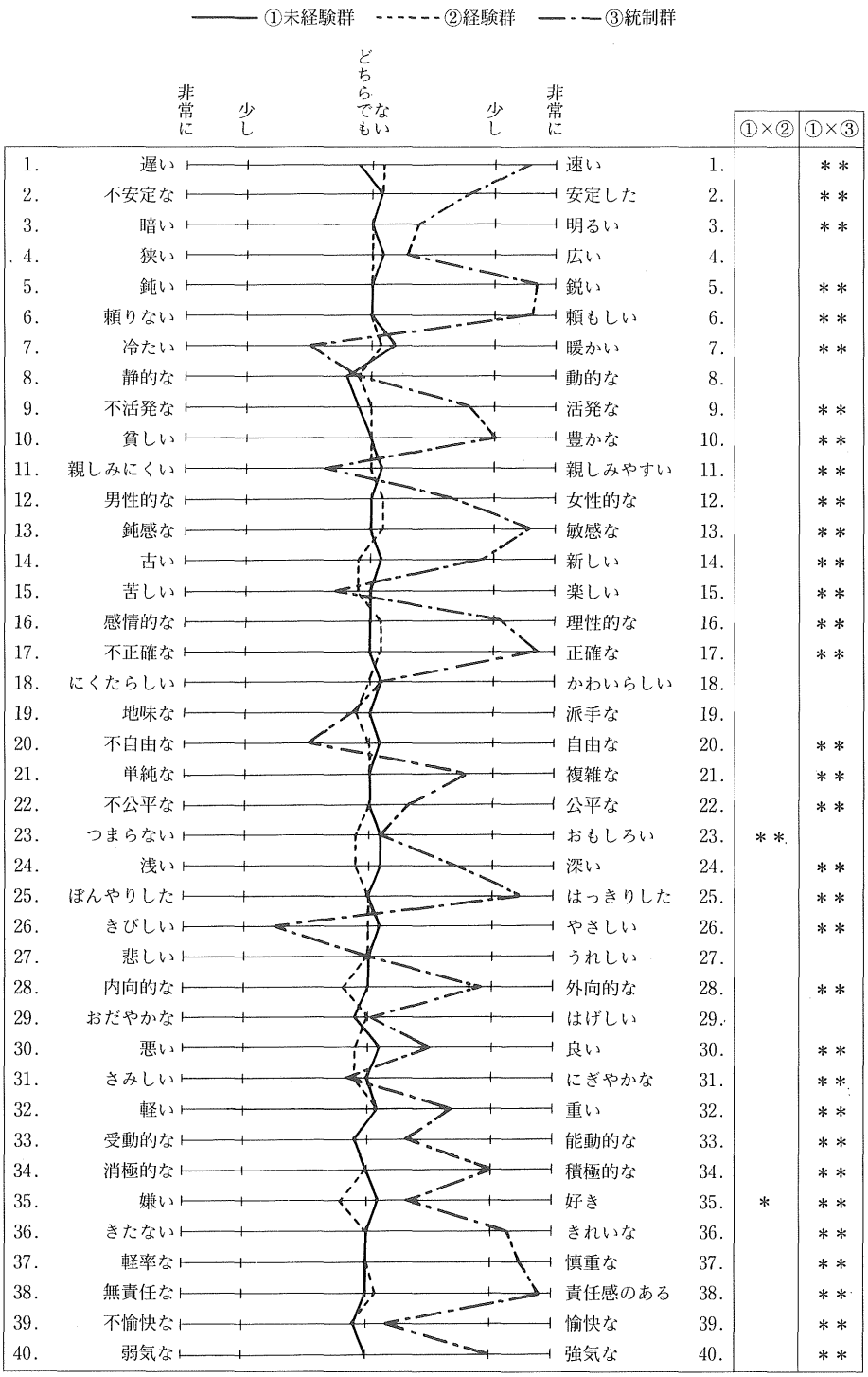
（ただし，同一の調査用紙を2回使用した）

H93年度生は，1年生4月の最初の講義時間。

J 92年度生・N92年度生・A92年度生は，1年生4月の最初の講義時間。

調査対象学生に対する手続きは，調査用紙の冒頭に組み込まれている教示を読み上げる方法によった。すなわち，「下に，40個の形容詞が対比してならんでいます。“秘書”のイメージは，この対比した形容詞の，どの辺に位置するでしょうか。(例）にならってその場所に○印をつけてください」というものであり，与えられた5段階尺度のうちから，一つを選択してチェックするように求められた。

調査結果をまとめるにあたり，調査対象の学生を3つのグループに分けた。3つのグループとそれらに含まれる年度の学生は以下の通りである。



＊$p<.05$，＊＊$p<.01$

図1　「秘書」に対するイメージの比較

＊グループ１⇨秘書教育未経験群(以下，未経験群)：H92・H93の１年生時
＊グループ２⇨秘書教育経験群　(以下，経験群)　：H91・H92の２年生時
＊グループ３⇨統制群　　(以下，統制群)　：Ｊ92・N92・A92の１年生時

Ⅲ。結果と考察

１．秘書イメージの比較

図１は，調査対象学生が40項目に対してどのような評価をしたのかをグループ別にまとめた結果である。評価に際しては，(左側)「非常に：１点」→「少し：２点」→「どちらでもない：３点」→「少し：４点」→「非常に：５点」(右側)を与えて点数化し，各グループの合計得点ならびに平均値，標準偏差(ＳＤ)を算出して，各項目ごとにＦ検定後，ｔ検定を実施して比較した。図の中で，①未経験群は入学直後の秘書専攻１年生，②経験群は１年間の秘書教育を経験した秘書専攻の２年生当初，③統制群は秘書教育を目的にしていない入学直後の他専攻１年生を指している。平均値が“1.00”に近づくほど，各形容詞対の左側への評価が強いことを現わし，反対に，“5.00”に近づくほど，各形容詞対の右側への評価が強いことを現わしている。統計的には対象者が多数の場合，中心化傾向がはたらき，評価が“3.00”に近づくので，その数値から離れるほど各形容詞対の左右への偏りの強いことが理解できる。ここでは，平均値ならびに検定の結果に基づいた特徴的な諸点について考察する。

未経験群と経験群の各形容詞対へのプロフィールは，図からも理解されるように極めて類似した傾向を取っている。また，「どちらでもない」という水準化の方向が認められる。これらの未経験群と経験群のデータは何を意味するのだろうか。三好[2)]のデータでは，①機能（活動性）の領域で右側形容詞への意識が強い，②価値（評価性）の領域では「頼もしい」「責任感のある」の測定値が高い，③感情の領域では「親しみにくい」「苦しい」「地味な」という印象を持つ，④総合（力量性）では「女性的」「理性的」な値が高いという結果が得られ，“秘書のイメージは活動的で信頼性があり，女性的な職業として捉えている”と結論づけている。本学における今回のデータを見る限り，“秘書を専攻する”という判断の前にあるイメージがかなり希薄であることを否定できないように思われる。未経験群が入学前に抱いていた秘書に対する認知的な枠組みは，大きな特徴を持たない平板なところにあるといえる。「秘書とは何か」という知識とは別に，秘書の華やかなイメージを心理的な側面から捉えきれないのではないかと思われる。

秘書教育を１年間受けた後，経験群のイメージに大きな変化が生じたのだろうか。図を見る限りにおいて，先にも述べた通り特徴的な違いは存在していない。実際の秘書教育と，このような秘書イメージとを同一視することには無理があろうが，幾分かの変化を期待したのである。図の①×②の欄は，未経験群と経験群のイメージの差を検定した結果である。秘書教育の経験後，イ

メージに違いが認められたのは２項目であった。№23「つまらない－おもしろい」（感情）と，№35「嫌い－好き」（感情）がそれである。№23は未経験群が3.08（ＳＤ＝1.01），経験群が2.85（ＳＤ＝0.85）で１％水準，№35は未経験群が3.06（ＳＤ＝1.29）経験群が2.83（ＳＤ＝1.01）で５％水準となり，それぞれ有意なイメージの差が現われた。しかし，その差は秘書教育の経験によって“つまらない”“嫌い”というイメージの強まったことを意味するものである。このことが何を物語っているのかは不明だが，少なくとも１年間の教育が２つの項目に否定的なイメージを与えたといえるのである。また，その項目（形容詞対）は両方とも感情を表わすものであり，秘書の持つ特殊性を感情的な側面からマイナスに捉えたと解釈できる。

次に，秘書教育や秘書職に対する動機が強い１年生（未経験群）と本学の他専攻の１年生（統制群）とを，同じ項目（形容詞対）の平均値やプロフィールで比較し，両者の間に明らかな違いが存在するのかを分析した。図１のプロフィールを概観すると，未経験群や経験群のそれが中央の尺度（どちらでもない）に近接しているが，統制群では右側尺度へ偏る項目がかなり多いことが分かる。評価点が４点を越えた項目を拾い出してみると，以下の通りである（下線方向）。

№ 1（遅い－早い）　№ 5（鈍い－鋭い）　№ 6（頼りない－頼もしい）

№13（鈍感な－敏感な）　№16（感情的な－理性的な）　№17（不正確な－正確な）

№25（ぼんやりした－はっきりした）　№34（消極的な－積極的な）

№36（きたない－きれいな）　№37（軽率な－慎重な）　№38（無責任な－責任感のある）

№40（弱気な－強気な）

下位尺度の分類では，機能（活動性）に６項目，価値（評価性）に３項目，総合（力量性）に３項目の合計12項目で感情はゼロであった。特に機能（活動性）の領域では60％にあたる６項目に強い意識を抱いており，秘書が素早く的確な行動を要請されている分野であると見ていることが理解できる。そこで，それらのイメージが秘書教育を目的とした未経験群とどの程度の関係にあるのかを検討した。図中に示された①×③の欄は，未経験群と統制群（調査の期間はほぼ同時）の回答結果を比較分析したものである。＊＊印は１％の水準で両者の間に有意な差があったことを示している。全体で33項目に統計的なイメージの違いが認められた。有意差があった形容詞を用いて統制群の秘書像を文章化すると，機能（活動性）の面では『速く，鋭く，活発で，敏感で，正確で，複雑で，はっきりしていて，能動的で，慎重である』と見ている。価値（評価）の面では『安定し，頼もしく，豊かで，新しく，公平で，厳しく，良く，積極的で，責任感がある』と見ている。感情の面では『明るく，冷たく，親しみにくく，苦しく，さみしく，好きで，愉快である』と見ている。総合（力量性）の面では『女性的で，理性的で，不自由で，深く，外向的で，重く，きれいで，強気である』と見ている。これらの特徴をまとめると，本学秘書専攻以外の新入学生は『秘書にはてきぱきとした機敏さと的確な行動が必要であり，厳しい仕事であるが現代的な職業として信頼性を持てる。秘書以外の学生からはその職種に距離感を覚えるが，

理性的・清潔な印象があって，特に外向的な女性に適している』というイメージを抱いていることが今回のデータから浮かび上がってくる。これは，おそらく一般的な“秘書”に対するイメージということができるであろう。一方，本来の秘書専攻1年生はこれらの一般的イメージを持たないまま入学し，1年間の秘書教育の結果でも特に大きな変化を見せていない。この結果は，本学に特殊なものなのだろうか。

2．因子構造による比較

ここでは，各項目（形容詞対）間の構造を把握するために，因子分析（factor analysis）を用いて検討することにした。因子分析の手続きは以下の通りである。①秘書教育未経験群，秘書教育経験群，統制群の3グループから得られたデータに基づく。②主因子法により因子を抽出したが，固有値ならびに寄与率の様子と因子の解釈を考慮して3因子を指定し，バリマックス（Varimax）回転を行い，因子行列（パターン）を求めた。**表1**は“未経験群”，**表2**は“経験群”，**表3**は“統制群”のバリマックス回転後の因子パターンをそれぞれ示したものである。

未経験群の第Ⅰ因子に負荷量の高い項目は，「責任感のある」「敏感な」「正確な」「鋭い」「頼もしい」「はっきりした」「慎重な」「速い」「積極的な」などの“秘書”に求められる基本的な資質を多く示す形容詞が中心なので，『基本的な資質』を表わす因子と考えられる。第Ⅱ因子に負荷量の高い項目は，「親しみやすい」「かわいらしい」「暖かい」「やさしい」「うれしい」「愉快な」など，“秘書”を取り巻く感情を表わす形容詞が中心なので『ホットな感情』を表わす因子と考えられる。第Ⅲ因子に負荷量の高い項目は，「地味な」「おだやかな」の2項目であるが，これは“秘書”の『静的な活動』を表わす因子と考えられる。

経験群の第Ⅰ因子に負荷量の高い項目は，「責任感のある」「鋭い」「敏感な」「頼もしい」「正確な」「慎重な」「速い」「はっきりした」など，未経験群の第Ⅰ因子と全く同一の項目から構成（負荷量には差がある）されているので，これも“秘書”に求められる『基本的な資質』を表わす因子と考えられる。第Ⅱ因子に負荷量の高い項目は，「親しみやすい」「暖かい」「かわいらしい」「やさしい」「愉快な」「うれしい」などが中心で，未経験群の第Ⅱ因子と類似の項目から構成されているので，これも“秘書”を取り巻く『ホットな感情』を表わす因子と考えられる。第Ⅲ因子に負荷量の高い項目は，「にぎやかな」「派手な」「自由な」「はげしい」であり，これは“秘書”の『動的な活動』を表わす因子と考えられる。

統制群の第Ⅰ因子に負荷量の高い項目は，「親しみやすい」「暖かい」「明るい」「やさしい」「楽しい」「かわいらしい」「良い」などで，“秘書”を取り巻く『ホットな感情』因子と考えられる。第Ⅱ因子に負荷量の高い項目は，「正確な」「慎重な」「責任感のある」「敏感な」「頼もしい」「鋭い」などから成り，“秘書”の『的確な行動』を表わす因子と考えられる。第Ⅲ因子に負荷量の高い項目は，「積極的な」「活発な」「外向的な」「強気な」「はげしい」「動的な」などで，

表1　未経験群における因子パターン

番号	形容詞対		I	II	III	共通性
38.	無責任な	責任感のある	0.967			0.974
13.	鈍感な	敏感な	0.962			0.951
17.	不正確な	正確な	0.958			0.946
5.	鈍い	鋭い	0.954			0.926
6.	頼りない	頼もしい	0.950			0.935
25.	ぼんやりした	はっきりした	0.949			0.922
37.	軽率な	慎重な	0.947			0.950
1.	遅い	速い	0.941			0.910
34.	消極的な	積極的な	0.926			0.868
36.	きたない	きれいな	0.898			0.853
9.	不活発な	活発な	0.863			0.792
40.	弱気な	強気な	0.856			0.735
28.	内向的な	外向的な	0.850			0.746
21.	単純な	複雑な	0.848			0.728
10.	貧しい	豊かな	0.844			0.728
24.	浅い	深い	0.819			0.681
16.	感情的な	理性的な	0.815			0.673
14.	古い	新しい	0.808			0.672
35.	嫌い	好き	0.764			0.667
30.	悪い	良い	0.743			0.668
32.	軽い	重い	0.729			0.562
4.	狭い	広い	0.707			0.611
23.	つまらない	おもしろい	0.687			0.560
3.	暗い	明るい	0.675	0.426		0.639
12.	男性的な	女性的な	0.637			0.553
2.	不安定な	安定した	0.613			0.439
33.	受動的な	能動的な	0.570			0.383
22.	不公平な	公平な	0.504			0.343
8.	静的な	動的な	0.399			0.209
20.	不自由な	自由な	−0.390			0.345
11.	親しみにくい	親しみやすい		0.756		0.603
18.	にくたらしい	かわいらしい		0.713		0.573
7.	冷たい	暖かい		0.653		0.495
26.	きびしい	やさしい		0.624		0.485
27.	悲しい	うれしい	0.352	0.521		0.418
39.	不愉快な	愉快な	0.456	0.475		0.436
15.	苦しい	楽しい		0.466		0.279
31.	さみしい	にぎやかな		0.405		0.204
19.	地味な	派手な			−0.512	0.269
29.	おだやかな	はげしい			−0.391	0.263
因子寄与			19.874	3.946	1.174	

表 2　経験群における因子パターン

番号	形容詞対		I	II	III	共通性
38.	無責任な	責任感のある	0.962			0.965
5.	鈍い	鋭い	0.951			0.916
13.	鈍感な	敏感な	0.949			0.942
6.	頼りない	頼もしい	0.946			0.919
17.	不正確な	正確な	0.944			0.943
37.	軽率な	慎重な	0.941			0.922
1.	遅い	速い	0.935			0.903
25.	ぼんやりした	はっきりした	0.904			0.852
36.	きたない	きれいな	0.872			0.817
34.	消極的な	積極的な	0.866			0.787
9.	不活発な	活発な	0.851			0.762
21.	単純な	複雑な	0.847			0.734
28.	内向的な	外向的な	0.827			0.762
16.	感情的な	理性的な	0.827			0.733
10.	貧しい	豊かな	0.819			0.724
40.	弱気な	強気な	0.814			0.682
24.	浅い	深い	0.811			0.667
32.	軽い	重い	0.780			0.658
14.	古い	新しい	0.753			0.615
30.	悪い	良い	0.735	0.374		0.682
3.	暗い	明るい	0.729	0.453		0.743
12.	男性的な	女性的な	0.660			0.560
4.	狭い	広い	0.648			0.535
2.	不安定な	安定した	0.623	0.388		0.542
35.	嫌い	好き	0.618	0.408		0.551
22.	不公平な	公平な	0.548	0.366		0.434
23.	つまらない	おもしろい	0.519			0.381
20.	不自由な	自由な	−0.535		0.374	0.518
8.	静的な	動的な	0.469			0.335
33.	受動的な	能動的な	0.382			0.194
11.	親しみにくい	親しみやすい		0.726		0.591
7.	冷たい	暖かい	0.372	0.675		0.597
18.	にくたらしい	かわいらしい		0.638		0.444
26.	きびしい	やさしい		0.565		0.380
39.	不愉快な	愉快な	0.397	0.542		0.494
27.	悲しい	うれしい		0.455		0.313
15.	苦しい	楽しい		0.455		0.300
29.	おだやかな	はげしい		−0.399	0.373	0.300
31.	さみしい	にぎやかな			0.470	0.297
19.	地味な	派手な			0.462	0.317
因子寄与			19.134	4.278	1.396	

表 3　統制群における因子パターン

番号	形容詞対		I	II	III	共通性
11.	親しみにくい	親しみやすい	0.662			0.439
7.	冷たい	暖かい	0.626			0.393
3.	暗い	明るい	0.579			0.396
26.	きびしい	やさしい	0.565			0.385
15.	苦しい	楽しい	0.558			0.332
18.	にくたらしい	かわいらしい	0.526			0.292
30.	悪い	良い	0.486			0.290
35.	嫌い	好き	0.466			0.239
31.	さみしい	にぎやかな	0.464		0.356	0.360
39.	不愉快な	愉快な	0.412			0.181
23.	つまらない	おもしろい	0.410			0.237
27.	悲しい	うれしい	0.377			0.149
20.	不自由な	自由な	0.375			0.248
17.	不正確な	正確な		0.601		0.376
37.	軽率な	慎重な		0.582		0.342
38.	無責任な	責任感のある		0.566		0.341
13.	鈍感な	敏感な		0.523		0.292
6.	頼りない	頼もしい		0.516		0.282
5.	鈍い	鋭い		0.464		0.281
25.	ぼんやりした	はっきりした		0.437		0.279
16.	感情的な	理性的な		0.425		0.194
1.	遅い	速い		0.414		0.184
24.	浅い	深い		0.374		0.152
34.	消極的な	積極的な			0.615	0.416
9.	不活発な	活発な			0.589	0.381
28.	内向的な	外向的な			0.533	0.322
40.	弱気な	強気な			0.513	0.378
29.	おだやかな	はげしい	−0.361		0.459	0.344
8.	静的な	動的な			0.454	0.241
19.	地味な	派手な			0.400	0.245
33.	受動的な	能動的な			0.375	0.144
4.	狭い	広い				0.190
32.	軽い	重い				0.184
36.	きたない	きれいな				0.151
22.	不公平な	公平な				0.147
14.	古い	新しい				0.132
21.	単純な	複雑な				0.126
12.	男性的な	女性的な				0.096
2.	不安定な	安定した				0.092
10.	貧しい	豊かな				0.071
因子寄与			4.160	3.257	2.905	

表4　3グループで抽出された因子の比較

グループ	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子
未経験群	基本的な資質 (19.88)	ホットな感情 (3.95)	静的な活動 (1.17)
経験群	基本的な資質 (19.13)	ホットな感情 (4.28)	動的な活動 (1.40)
統制群	ホットな感情 (4.16)	的確な行動 (3.26)	機敏な態度 (2.91)

(　) 内の数字は因子寄与

“秘書”の活動面での『機敏な態度』を表わす因子と考えられる。未経験群と経験群が40項目に回答した結果は，それらの項目が3因子のどれかに含まれるのに対して，統制群においては3因子に含まれない項目が10項目も存在している。指定した因子数と関係するのだろうが，また統制群に的確な傾向が認められるのかもしれない。

これら3グループの因子分析の結果，抽出された因子名をまとめたものが**表4**である。未経験群と経験群は，第Ⅰ因子『基本的な資質』に共通して高い因子寄与を持っている。第Ⅱ因子『ホットな感情』までは項目間に負荷量の前後はあるが，ほぼ同じ因子構造である。これは秘書専攻初年次と1年間の秘書教育経験後のイメージ構造に変化のないことを意味している。先に考察したイメージの平均像は希薄であったが，未経験群も経験群も秘書の一般的な特性については捉えているといえる。これに対して統制群がイメージする秘書像は，“暖かな人間関係や雰囲気”から始まり，秘書に求められる“的確で機敏な行動や態度”が続き，あらゆることを包含して秘書像を描いている秘書専攻学生よりも秘書についての意識が適正のように思われる。

本研究は，本学の4専攻（経営学科の経営実務専攻・秘書専攻，文学科の日本文学専攻・英米文学専攻）の学生に対して「秘書」についてのイメージを40項目の形容詞対を用いて検討した。その結果，秘書専攻学生である秘書教育未経験群と経験群は，教育の有無に関わらず共に秘書のイメージがはっきりした形を取っていなかった。しかし，漠然とした一般的な秘書像を認識していることは間違いないところであった。一方，秘書以外の専攻学生は，入学直後ではあるものの「秘書」はどういう職業であるのかといった専門性への認識を，秘書専攻学生以上に認識していることが明らかにされた。

〈引用文献〉

1)　全国短期大学秘書教育協会・編：『秘書学概論』．紀伊國屋書店，1988．

2)　三好摂子：『女子学生における「秘書」のイメージについて――将来像との分析比較――』．広島

文教女子大学紀要25，1990.

3)　井上正明・小林利宣：『日本におけるＳＤ法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観』．教育心理学研究，33，3，1985.